

取り上げたのは、湖北省武漢で毎年行われている、チベット仏教僧を導師とした「放生儀礼」である。鯉などの魚類一般、および蛙や亀などを市場で買い、これを自らの手でもとの場所へ返す、という放生の行為は、近年の中国都市部の仏教系団体が好んで行う修道実践であり、これ自体はチベット仏教儀軌との直接の関係を持たない。しかし、近年チベット東縁部で大きな勢力を誇るゾクチェン系の僧院では、指導僧がこぞって放生の功德を説く教書類を漢語で出版しており、それらは定期的にこれらの僧院へ往来して教えを授かる漢民族信徒たちの間に広く普及している。本論の事例では、チベット東縁部の本山で受戒し、武漢で修道センターを立ち上げた漢民族の女性行者が、自らの受戒僧であるラマを遠くチベットの本山より招請し、トラック四台分、八千五百キロ余りにのぼる水生類を市場で購入したうえで、ラマの指導のもとでこれを長江に放流し、「不殺生戒」の実践による功德を信徒全員で分かち合う光景が展開されていた。

チベット東縁部では、二〇〇一年に漢民族信徒との関係で大きな転機を迎えており、それは地元政府による外来信徒の強制排除という形で幕引きを見ている。これ以降、漢民族信徒が指導僧を内地に招き、共同で遂行可能な修道形態として、もともと内地でも盛んに行われている放生儀礼を借用した、という解釈が可能である。

今後は、チベット僧と漢民族信徒との日常的応答関係をさらなる事例から照射しつつ、そこに見られる不殺生の実践と、ナショナルな自己形成の理念として本土チベット社会に土着化さ

れていく「アヒンサー」の関係をさらに踏み込んで検討していきたい。

近代中国東北部仏教の一動向

野 世 英 水

近代の中国東北部には多様な宗教が存在し、独自にまたは相互に関係しながら活動していた。そのうち仏教は在来の仏教のうえに管内の仏教が流入し、さらには日本による東北部支配が強まるにつれて日本の仏教も流入することとなり、それらは政治的諸関係を背景としながら複雑な相互関係を生み出していた。ここではこのような近代中国東北部仏教の動向を日中戦争の戦前戦中ごろに時期を絞りつつ見てゆくこととしたい。また考察の基礎史料としては、一九八〇年代から順次編纂刊行されてきている中国の地方志をおもに用いることとしたい。地方志を用いた研究としては、大谷大学桂華淳祥先生のすぐれた先駆的業績がある。本稿はそのご研究に導かれてのものでもある。

地方志にみられる東北部のおもな中国人仏教者としては、倭虚(諦閑の弟子、多くの寺院を創建、修復)、如光(倭虚の弟子、ハルピン極楽寺方丈、満洲国仏教総会会長)、善果(倭虚の弟子、長春般若寺方丈、満洲国仏教総会新京支部長)、澍培(倭虚の弟子、長春般若寺方丈、満洲国仏教総会副会長)、仁信(長春般若寺知客)、如蓮(吉林観音寺方丈、満洲国仏教総会吉

林省分会長)、董暘(倭虚の弟子、満洲国仏教護法会設立)、印空(長春般若寺の僧、満洲国仏教總會組織部長)、智眼(営口楞嚴寺方丈、満洲国仏教總會幹事)、景印涵(居士、満洲国仏教總會教化部長)、静観(倭虚の弟子、ハルピン極楽寺第五代方丈)、意空(千山大仏寺の僧、満洲国仏教總會総務部長)、洪素賢(居士、世界大同仏教会哈爾濱分会設立)、修縁(瀋陽慈恩寺方丈、満洲国仏教總會奉天分会長)、導塵(瀋陽万寿寺方丈)、樂果(営口楞嚴寺第三代方丈)その他が挙げられる。これら仏教者の法脈を見ると、東北部仏教界は倭虚とその弟子の系統によって組織化されていたことが知られる。倭虚は日本の仏教者との関係が深く、当時の日華仏教研究会からは他の中国人僧侶に比して高く評価されており、それは東北部においても同様であったと思われる。なお満洲国時代、中国人僧侶はすべて満洲国民生部によって七つの僧級に分けられ、三つの等級に分けられた寺院の方丈などになっていた。すなわち僧侶および寺院は満洲国政府の統制のもとにおかれていたわけであるが、倭虚の弟子たちのなかには上位の僧級を与えられ、最高等級の寺院の方丈を務めるものも多かった。

地方志にみられる東北部のおもな仏教団体としては、一九三四年に発足した満洲国仏教護法会や、それが発展して一九三九年に発足した満洲国仏教總會がある。また一九二九年に発足し一九三三年に名称を変更した満洲大同仏教会や、一九二三年に設立された(黒竜江省)仏教理事会、一九二一年設立の瀋陽仏学会、一九三四年設立の安東仏教居士林、一九三六年設立の大連仏学研究会その他がある。このうち満洲国仏教總會や満洲大

同仏教会はそれぞれ省、市、県などに支部や分会を設け、東北部仏教界を組織化していった。またこれら仏教団体は満洲国民生部や満洲国協和会中央本部の意向のもと設立され、活動しており、満洲国政府(実質的には日本政府)の影響下におかれていた。さらにこれら仏教団体の活動の中心を担ったのは倭虚の弟子たちであり、その他の諸仏教団体も多くが倭虚の弟子たちとの関係のなかで活動をおこなっていた。なお東北部の仏教団体の設立、活動に日本人仏教者の姿も見え隠れするが、その具体相についてはいまのところ不明である。

近代中国東北部仏教の動向に関しては検討すべき課題が多いが、今後倭虚をはじめ東北部の仏教者と、関内の仏教者や当時の中国仏教会との関係はどうであったかや、東北部で活動していた日本人仏教者と中国人仏教者との具体的関わりはどうであったかなどの考察が必要であろう。また地方志の記載内容の史料批判も、前提的に必要であろう。